

市長賞

一木 萌花 (いちき もえか) 第五小 5年生

作品名: 日常のありがたさ

図 書: いわたくんちのおばあちゃん

八月十五日は終戦記念日です。私はこの日、テレビや新聞で、戦争についてのニュースをたくさん目にしました。私の両親も戦争を経験していないので、私は戦争のことが知りたくなり、この『いわたくんちのおばあちゃん』という本を借りて読みました。

この本は、いわたくんのおばあちゃんが主人公の物語です。いわたくんのおばあちゃんは、家族と写真をとるのをいやがります。理由は、おばあちゃんが小さいころ、家族と写真をとった後、家族を戦争で失ってしまいました。そのため家族でとった写真はおばあちゃんたった一人で見ることになってしまったという悲しい経験をしたからです。

この本には戦争の悲しい光景がえがかれています。その中でも、おばあちゃんが焼けてしまった家を見に行き家族のこげた体を見つけるところがとても印象に残りました。私が戦争で家族を失ったら…一人であるのがきらいな私には、想像するのもおそろしいことで、ましてや目の前に家族の死体があったら怖くて近づくこともできないだろうなと思いました。

しかし一緒にこの本を読んだ私の母は、おばあちゃんのお母さんと末っ子のきみちゃんが台所でうずくまるようにして、なくなっていたシーンで「あのしゅんかんお母さんはとっさに小さいわが子をそのむねにかばったのでしょう。強く強くだきしめたのでしょう。ふたりのむねが合わさったところだけ、ほんの少しだけ洋服のぬのが焼き残っていたのです。」という部分で涙が止まらなかったそうです。「きけんを感じたしゅんかん、とっさに子供をだきしめたという行動と、それを物語るように残された洋服のぬのが何とも悲しく母親のわが子に対する愛情の深さを強く感じた。」とっていました。私もしょう来、お母さんになってまたこの本を読んだら、今とはちがった感想を持つのもかもしれません。

ご飯を食べること、ふとんでねむること、兄弟ゲンカをすること、勉強すること、

友達と遊ぶこと、私はそれらを当たり前だと思っていました。時々、「勉強やだなー」「今日の夕飯食べたくないなー」「弟なんかいなければいいのになー」と思う時もあります。でも家も家族も失ってしまったら、こんな不満すら言えなくなってしまうのです。このことに気づけたのはこの、戦争の本を読んだからでした。

今の日本には戦争がありません。でも、世界の中には今も戦争で辛い、悲しい思いをしている人々がたくさんいます。私はこの世界から戦争がなくなり、戦争で家族を失う人がいなくなる時がきてほしいです。

当たり前の日常を一しゅんにして失ってしまうという点では、東日本大震災などの災害も同じだと思えます。いつ私達もこのような状況になるか分かりません。私はこの当たり前な毎日が幸せなんだということを忘れずに、一日一日を大切にしていこうと思います。